



消化管の病理学 第2版

藤盛孝博 ● 著

ゆ っ く り 急 げ
“Festina lente”

簡明で画像が豊富な消化管病理学の傑作

評 者

竹本 忠良

日本消化器病学会名誉会長
山口大名誉教授

藤盛孝博著『消化管の病理学』の刊行のいきさつは、2つの序に詳しい。つい^{ゆ っ く り 急 げ}Festina lenteという名言を思い出す。この格言、ギリシア語 Speude brodeōs をエラスムスがラテン語化したと伝えられている。筆者は、フランソワ・ラブレー作(渡辺一夫訳)『第一之書 ガルガンチュワ物語』(岩波文庫 1973)で、この「悠々と急げ」を学んだ。今年、文庫化された柳沼重剛の『語学者の散歩道』には、どこに向かって急ぐのか自分が納得できる「区切り」といい、「楽しみつつ区切りをつけよ」と理解している(岩波現代文庫、48頁)。藤盛氏の本は、好評のうちに、改版できる「区切り」に達した。初版に、「この本の初期・中期の経緯」と表現したが、獨協医科大学の人体病理を担当して、さほど年月をおかないとき、長廻紘氏と企画したテーマ“内視鏡医に必要な病理学の基本”がついに中断し、「燃えつき症候群」に近い心情さえ味わたらしいだけに、感慨も深いだろう。単独執筆と決まっても、消化管全体にわたって、内視鏡像まで含めて諸資料を整えることに、さぞ苦労しただろう。その努力が報いられ、この本が狙いとした「消化管臨床医が日常臨床で臨床画像とマクロ・ミクロを含めた病理所見との対比を行う際に役に立つようにコンパクトに提示した」ことに成功している。

この“簡明消化管病理学”は図譜という形容を付けてもよい好著だが、この定価で出版されたことに、医学書院の意気込みも現れている。消化管全体に関心をもって、筆が立つ病理学者は意外に少ないのかもしれない。まず、症例の収集と選別が本書の大きな要素だから資料提供施設も見てみたが、出身の神戸大学に連なる関西は別にして、獨協医科大学に勤務12年にして、関東の研究フィールドをよくも育てたと感心している。筆者は、内視鏡の師近藤台

五郎先生までつながる研究会の木曜会(会長・寺野彰 獨協医科大学学長)に参加して、藤盛氏の懇切な病理所見の解説を知っている。だから、諸施設も喜んで、内視鏡写真・病理材料を提供して、本書の刊行に協力した。

気障だが、世阿弥『風姿花伝』の言葉を、馬場あき子『古典を読む風姿花伝』(岩波現代文庫 2003)を参照しながら引用しておく。それは、「年来稽古条々・四十四五」にある「天下に許(ゆる)され、能に得法(とくほう)したりとも、それにつきても、よき脇(わき)の為手(して)を持(も)つべし」云々がある。馬場は「天下に許された名手といえども、すぐれた『脇の為手』たる達者な助演者が必要だ」としたが、「脇の為手」をツレまでも含む助演者集団を擁することの必要性を説いたと考えている(40頁)。この本の狙いを貫くために、獨協医科大学消化器内科、東京女子医科大学外科ほか、助演者諸集団から擁護宣しきを得たことは幸いであつた。ちょうど Medical Tribune(2008年8月7日号)が「2007年9月、医道審議会で病理診断科が診療科名として認められ、今年4月から実施されている」ことを報じたばかりだ。「標榜科としての病理診断科」ができて、病理診断は医療行為であり、医療機関において、病理診断医が行う業務になった。この制度改定に併せ、平成18年度診療報酬の病理診断料が増額された。“病理診断外来”の開設も増えるだろうし、病理診断業務を専業とした開業も可能になった。やがて深刻な病理診断医の不足も改善する方向だろう。それにしても、タイミングのよい本書の改版である。

●B5 頁312 2008年

定価 12,600円(本体12,000円+税5%)

[ISBN 978-4-260-00620-0] 医学書院刊